石川県の高齢者の生きがいに関連する環境要因
―A市B町に居住する自主組織活動参加者―

八日市遥奈，加藤　ゆい，山路　朋子，牛村　春奈，桜井志保美

1）石川県立看護大学看護学部

要　旨

【目的】地域在住高齢者の生きがい意識に関連する環境要因を明らかにする．

【方法】A市（老年人口8,008人），B町（老年人口7,299人）の同意が得られた65歳以上の高齢者を対象に，無記名の自記式質問紙調査を実施した．分析にはχ^2検定，フィッシャーの正確確率検定，ロジスティック回帰分析を用いた．

【結果】研究参加者のうち60名（有効回答率57.1%）を分析対象とした．生きがい意識と有意な関連を認めた項目は，公民館活動（オッズ比5.111），CEQ合計点（オッズ比9.496），安心生活環境（オッズ比6.729），相互交流環境（オッズ比4.471）であった．

【考察】高齢者のいきがい意識には環境要因，特に地域の他者との交流と密接に関係していることが示唆された．高齢者の生きがい意識を良好に保つには，社会参加を継続し，人とのつながりが途切れないような環境を整備することが重要であると考えられる．

キーワード

高齢者，生きがい，地域環境，生活環境

はじめに

我が国は少子高齢・人口減少，地域社会の脆弱化等，社会構造の変化の中で，人々が様々な生活課題を抱えながらも住み慣れた地域で自分らしく暮らしていけるよう，地域住民等が支え合い，一人ひとりの暮らしと生きがい，地域をともに創っていくことのできる「地域共生社会」の実現が求められている[1]．

生きがいとは，日本独自の概念で，「高齢者が生きるために見出す意味や目的，価値であり，生きることに対する内省的で肯定的な感情の創出により実感される」と定義されている[2]．先行研究において生きがいは包括的環境要因に関連すること，環境要因が揃っていると健康関連QOLが良好であることが明らかにされている[3,4]．環境は地域により異なるため，生きがいに関連する環境要因も地域ごとに特徴があると推察される．そこで，本研究では石川県内の市町における生きがい意識に関連する環境要因を特定し，石川県内の高齢者の生きがい意識向上に必要な環境整備に寄与することを目的とする．

研究対象と方法

令和5年10月，A市は人口約2万人[5]，高齢化率41.7%（老年人口8,008人）の山に囲まれた自然豊かな市である．市内循環バスはあるが，1日4便と少なく，移動手段は車が主流である．A市の公民館，老人福祉センターでは，要望に合わせ健康ダンス教室やカラオケの会，お茶教室，書道教室，買い物ツアー等を行い，自主組織には活動の場を提供している．老人福祉センターでは，地区別送迎を行っている．B町は人口約2万5千人，

高齢化率 28.6％（老年人口 7,299 人）の海が近い町である．町内を循環するコミュニティバスは 1 日 7 便あり，A 市より比較的交通の便は良い．B 町の公民館では，要望に合わせて民謡教室や体操教室，囲碁の会，いきいきサロン，シニアクラブ等を行い，自主組織へ活動の場を提供している．

1．対象

①対象者

石川県の 65 歳以上の高齢者 80 人とした．

本研究のアウトカムとなる Ikigai-9 を用いてロジスティック回帰検定を実施した先行研究[6]，多変量ロジスティック回帰解析のサンプル数計算式[7] を参考に目標数を設定した．

②除外基準

以下の a または b に該当する者は研究対象から除外した．

a．転居後 1 年未満の者：転居後 1 年未満の時期は，転居先での生活環境要因が未確立，あるいは他の地域での生活環境要因の影響が残っている可能性があるため除外した．

b．認知症と診断されている者：認知症と診断されている者は，質問紙の質問の理解や指示されたことが出来ない恐れあり，正確なデータが得られない可能性があるため除外した．

③対象者の選定・依頼

石川県内の研究者の所属機関周辺の自治体の社会福祉協議会等に，対象者募集の協力依頼を行った．協力の得られた A 市および B 町の社会福祉協議会に，自主活動組織の中から対象者選定条件に合う 6 組織を紹介してもらった．研究者から活動参加者に研究依頼書，研究説明書，質問紙，研究者宛の返信用封筒を配布し，文書を用いて口頭で依頼した．

2．調査内容

無記名の自記式質問紙にて基本情報，生きがい意識，生活状況・生活環境を調査した．

1）基本情報

年齢，性別，主疾患で構成した．

2）生きがい意識

生きがい意識の評価には，Ikigai-9 の総得点を用いた．Ikigai-9 は，今井ら[4] によって開発され，生きがいを感じている精神状態（生きがい意識）を測定する．質問は全 9 項目あり，下位尺度 I「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」，下位尺度Ⅱ「未来に対する積極的・肯定的姿勢」，下位尺度Ⅲ「自己存在の意味認識」の 3 つの下位尺度から構成される．各項目について 5 段階のリッカート法で回答するものである．各項目の素点を加算し，総得点（範囲 9 ～ 45 点）及び各下位尺度Ⅰ～Ⅲの得点（範囲 3 ～ 15 点）を算出する．得点が高いほど生きがい意識が良好とされる．信頼性，妥当性は検証されている．

3）生活状況・生活環境

生活状況は，先行研究[8, 9] を参考に同居家族，家族と会う頻度，家庭や社会での役割，友人・知人と会う頻度，情報収集方法，人と交流する場などの 17 項目で構成した．

生活環境の評価は，高齢者のための包括的環境要因調査票簡易版（Community Environment Questionnaire 以下，CEQ とした．

CEQ は，Yabuwaki，et.al[10] によって開発された在宅高齢者の生活の質を高める環境因子を明らかにする自記式質問紙である．安心生活環境（落ち着いた気分でいられる環境，必要な援助を受けられる環境など）6 項目，相互交流環境（人の役に立てる環境，友人･知人と関係が良い環境など）6 項目，家族環境（家族関係が良好な環境，一緒に生活する人がいる環境）2 項目の 3 因子 14 項目で構成される．4 件法で尋ねるものであり，各項目「全くない」1 点，「少しある」2 点，「ある」3 点，「十分ある」4 点とし，それらを単純加算して因子別合計点を算出する．得点が高いほど満足した環境にある．地域在宅高齢者を対象とした調査で信頼性と基準関連妥当性，構成概念妥当性が検証されている．

調査期間は、令和 6 年 10 月 1 日から末日とした．

3．分析方法

Ikigai-9，CEQ は，中央値で高値群と低値群の 2 群に分け，「家族と会う頻度」，「友人・知人と会う頻度」は＜ 1 日 1 回以上～週に数回＞と＜月に数回～年に数回以下＞の 2 群に分けた．

Ikigai-9と，CEQの合計点，安心生活環境，相互交流環境，家族環境，家族と会う頻度，家庭や社会での役割，知人・友人と会う頻度，情報収集方法，災害時の備え，人と交流する場との関連にはχ^2検定およびフィッシャーの正確確率検定を用いた．次に，生きがい意識を目的変数に，環境要因を説明変数にした単変量ロジスティック回帰分析を行った．最後に，単変量ロジスティック回帰分析にて生きがい意識と有意な関連を認めた項目について先行研究[11]で生きがい感との関連が示されていた性別，年齢を調整因子とし、各説明変数1つを強制投入した多変量ロジスティック回帰分析を行った．本研究における統計処理には，統計解析パッケージspss ver.29（IBM社）を用い，有意水準は5%未満とした．

４．倫理的配慮

本研究は所属機関の倫理委員会の承認（2024-572）を得て実施した．

研究者は，紹介された活動の場に行き参加者に対して文書と口頭で，調査の趣旨，目的，対象者の選択基準・除外基準，調査内容，利益・不利益，プライバシーの保護，調査への参加は自由意思に基づくこと，無記名式質問紙調査のため質問紙に同意欄を設けていることや質問紙返送後は個人を特定することができないため同意の撤回ができないことを説明し，依頼した．

結　　果

質問紙は105名に配布し，80名より質問紙の返送があった（回収率76.2%）．そのうち，尺度を用いた質問への回答に欠損のあった者を除いた60名（有効回答率57.1%）を分析対象とした．

１．対象者の特徴（表１）

１）対象者の属性

本研究に参加した対象者の平均年齢は77.27 ± 6.4歳，前期高齢者は22名（36.7%），後期高齢者は38名（63.3%）であった．対象者の性別は，男性4名（6.8%），女性55名（93.2%）であった．対象者が有していた疾患は，高血圧24名（40.0%），眼疾患10名（16.7%），骨・関節疾患9名（15.0%），その他26名（43.3%），特にないと回答した者は12名（20.0%）であった．その他の疾患には，糖尿病，呼吸器疾患，悪性新生物などがあった．

ikigai-9合計点の中央値は29.0であった．CEQの中央値は合計点42.0点，安心生活環境18.0点，相互交流環境18.0点，家族環境6.0点であった．

２）対象者の生活状況・生活環境

独居の者は16名（27.1%），同居の者は43名（72.9%）であった．家族と会う頻度は，1日1回以上～週に数回の者が46名（76.7%），月に数回～年に数回以下の者は14名（23.3%）であった．家庭や社会での役割は，掃除と料理それぞれ50名（83.3%），洗濯49名（81.7%）であった．情報収集方法は，テレビ55名（91.7%），回覧板40名（66.7%），インターネット22名（36.7%）であった．人と交流する場は，体操37名（61.7%），食事会30名（50.0%）公民館活動26名（43.3%）であった．

表１　対象者の特徴

項目		n(%)
年齢（n=60）		
	前期高齢者	22(36.7)
	後期高齢者	38(63.3)
性別（n=59）		
	男性	4(6.8)
	女性	55(93.2)
主疾患分類（n=60）		
	高血圧	24(40.0)
	眼疾患	10(16.7)
	骨・関節疾患	9(15.0)
	その他	26(43.3)
	なし	12(20.0)
		中央値(四分位範囲)
CEQ（n=60）		
合計点		42.0(39.0-47.0)
	安心生活環境	18.0(17.0-21.0)
	相互交流環境	18.0(16.0-20.0)
	家族環境	6.0(5.0-7.0)
Ikigai-9（n=60）		
合計点		29.0(26.0-34.0)

２．生きがいと生活状況・生活環境との関連（表２・表３）

χ^2 検定の結果は表 2 に示す．情報収集方法として「インターネット」と回答した者，人と交流する場として「公民館活動」と回答した者は，回答しなかった者に比べて Ikigai-9 合計点の高い者の割合が有意に多かった（p=0.01，p=0.04）．CEQ 合計点，CEQ の安心生活環境，CEQ の相互交流環境の得点が高い者は低い者に比べて Ikigai-9 合計点の高い者の割合が有意に多かった（p<0.001，p=0.002，p=0.004）．家庭や社会での役割，家族・友人・知人と会う頻度は生きがい意識と有意な関連を認めなかった．

多変量ロジスティック回帰分析にて有意な関連を認めた項目は，人と交流する場として公民館活動と回答した者のオッズ比 5.111（p=0.011），CEQ 合計点高値群のオッズ比 9.496（p=0.001），CEQ 下位尺度の安心生活環境高値群のオッズ比 6.729（p=0.003），相互交流環境高値群のオッズ比 4.471（p=0.013）であった（表 3）．

考　　察

１．対象者の特徴

総務省統計局[12]によると，日本の高齢者のうち，前期高齢者は 42.7%，後期高齢者は 57.2%であった．本研究の参加者の後期高齢者の割合 63.3%は，日本全国と比べて高く，本研究に参加した対象者は，後期高齢者が多い特徴があった．令和 2 年の国勢調査[13]によると，日本の男女比は男性 48.6%，女性 51.4%であり，本研究の対象者は女性が 93.2%と女性に偏りがあったといえる．地域交流サロンに参加する高齢者を対象にした先行研究[8]では、対象者の平均年齢が 83.6 ± 6.9 歳であり，その 77.5%が女性であったことが報告されている．地域の自主活動組織の場に参加する高齢者へ研究参加募集を行った本研究も先行研究同様に，後期高齢者や女性の割合が多かった．

高齢者を対象とした生きがい意識に関する先行研究[8,14]で報告された ikigai-9 合計点は 28.6-30.2 の範囲であった．本研究の対象者の ikigai-9 合計点は 29.0 であり，先行研究と同程度であったと考えられる．

北海道，東北，首都，中部，近畿に居住する 178 名の高齢者を対象にした生活環境に関する先行研究[10]では CEQ 合計点の中央値は 42.2（27-60）であった．本研究の CEQ 合計点は 42.0（39-47）であり，先行研究で示された 25-75 パーセントタイル値の範囲内であった．

２．生きがい意識に関連する要因

生きがい意識は，公民館活動，CEQ 合計点，安心生活環境，相互交流環境と有意に関連した．

安心生活環境は，落ち着いた気分でいられる環境，医療･福祉サービスを適切に利用できる環境，必要な援助を受けられる環境などの項目で構成されている．安心して生活出来る環境が生きがい意識に関連することは示されたが，生活環境に関する医療・福祉サービスの利用状況が調査項目に含まれておらず十分ではなかった．安心生活環境の中の何が生きがいに関連しているかといった詳細については調査しなかったため、今後検討する必要がある．

相互交流環境は，周囲の人との交流や社会的役割などの項目で構成されている．先行研究から生きがいの関連要因として友人との交流，近所づきあい，趣味・習い事[15]，友人の相談にのること[16]が報告されている．本研究では，公民館活動が生きがい意識と関連した．対象地域での公民館活動は，高齢者が相互交流をする機会となり，生きがい意識を持つことにつながっていたと考えられる．

本研究の対象地域では，地域活動の参加者同士で交流する姿や地域活動へ地域住民同士が誘い合って参加する姿が見られ，A 市では交通の便が悪い地域に対して，移動支援を，B 町ではコミュニティバスのが運行を行っていた．このように，移動手段が少ない人でも交流の場に行けるような交通手段の整備が人とのつながりや，いきがいを維持するために必要であると考えられる．

石川県内の市町における高齢者の生きがい意識は，人とのつながりに関わる環境要因と関連することが示唆された．高齢者が社会参加を継続し，つながりが途切れないような環境を整備していく

表２　Ikigai-9 の関連要因

			Ikigai-9(中央値29.0)			
			高値群	低値群	p値	
			n(%)	n(%)		
同居家族の有無 n=59		独居	7(43.7)	9(56.3)	0.10	
		同居	29(67.4)	14(32.6)		
家族と会う頻度 n=60		1日1回以上～週に数回	30(65.2)	16(34.8)	0.13	
		月に数回～年に数回以下	6(42.9)	8(57.1)		
家庭や社会での役割 n=60	仕事	あり	3(42.9)	4(57.1)	0.42	†
		なし	33(62.3)	20(37.7)		
	掃除	あり	30(60.0)	20(40.0)	1.00	†
		なし	6(60.0)	4(20.0)		
	料理	あり	31(62.0)	19(38.0)	0.50	†
		なし	5(50.0)	5(50.0)		
	洗濯	あり	29(59.2)	20(40.8)	1.00	†
		なし	7(63.6)	4(36.4)		
	買い物	あり	29(63.0)	17(37.0)	0.38	
		なし	7(50.0)	7(50.0)		
	畑仕事	あり	8(44.4)	10(55.6)	0.11	
		なし	28(66.7)	14(33.3)		
	地域のボランティア活動	あり	19(70.4)	8(29.6)	0.14	
		なし	17(51.5)	16(48.5)		
知人・友人と会う頻度 n=60		1日1回以上～週に数回	30(62.5)	18(37.5)	0.52	
		月に数回～年に数回以下	6(50.0)	6(50.0)		
移動手段 n=60	車（自分で運転）	あり	22(61.1)	14(38.9)	0.83	
		なし	14(58.3)	10(41.7)		
	徒歩のみ	あり	5(50.0)	5(50.0)	0.50	†
		なし	31(62.0)	19(38.0)		
情報収集方法 n=59	回覧板	あり	26(65.0)	14(35.0)	0.26	
		なし	10(50.0)	10(50.0)		
	テレビ	あり	33(60.0)	22(40.0)	1.00	†
		なし	3(60.0)	2(40.0)		
	友人・知人	あり	33(64.7)	18(35.3)	0.14	†
		なし	3(33.3)	6(66.7)		
	新聞	あり	32(64.0)	18(36.0)	0.18	†
		なし	4(40.0)	6(60.0)		
	インターネット	あり	17(77.3)	5(22.7)	0.04	†
		なし	19(50.0)	19(50.0)		
人との交流の場 n=59	体操	あり	22(59.5)	15(40.5)	0.75	
		なし	14(63.6)	8(36.4)		
	カラオケ	あり	8(57.1)	6(42.9)	0.73	
		なし	28(62.2)	17(37.8)		
	ダンス教室	あり	7(53.8)	6(46.2)	0.55	
		なし	29(63.0)	17(37.0)		
	食事会	あり	18(60.0)	12(40.0)	0.87	
		なし	18(62.1)	11(37.9)		
	公民館活動	あり	21(80.8)	5(19.2)	0.01	†
		なし	15(45.5)	18(54.5)		
	町内の集まり	あり	27(58.7)	19(41.3)	0.49	†
		なし	9(69.2)	4(30.8)		
CEQn=60	合計点	高値群	26(83.9)	5(16.1)	<0.001	†
		低値群	10(34.5)	19(65.5)		
	安心生活環境	高値群	30(73.2)	11(26.8)	0.002	
		低値群	6(31.6)	13(68.4)		
	相互交流環境	高値群	28(73.7)	10(26.3)	0.004	
		低値群	8(36.4)	14(63.6)		
	家族環境	高値群	29(67.4)	14(32.6)	0.06	
		低値群	7(41.2)	10(58.8)		

X^2検定，† Fisherの正確確立検定

表３　高齢者の生きがい意識を目的変数としたロジスティック回帰分析

	単変量解析			多変量解析		
	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
同居あり	0.375	0.116−1.217	0.102			
家族と会う頻度高値群	2.500	0.738−8.469	0.141			
家庭や社会での役割						
仕事あり	0.455	0.092−2.244	0.333			
掃除あり	1.000	0.250−3.998	1.000			
料理あり	1.632	0.417−6.388	0.482			
洗濯あり	0.829	0.214−3.209	0.785			
買い物あり	1.706	0.510−5.701	0.386			
畑仕事あり	0.400	0.129−1.238	0.112			
地域のボランティア活動あり	2.235	0.765−6.527	0.141			
友人・知人と会う頻度高値群	1.667	0.466−5.956	0.432			
移動手段						
車(自分で運転)	1.122	0.392−3.215	0.830			
徒歩のみ	0.613	0.157−2.399	0.482			
情報収集方法						
回覧板あり	1.857	0.624−5.530	0.266			
テレビあり	1.000	0.154−6.480	1.000			
友人・知人あり	3.667	0.818−16.436	0.090			
新聞あり	2.667	0.664−10.714	0.167			
インターネットあり	3.400	1.042−11.094	0.043	3.044	0.895−10.361	0.075
人と交流する場						
体操あり	0.838	0.282−2.490	0.751			
カラオケあり	0.810	0.239−2.737	0.734			
ダンス教室	0.684	0.197−2.373	0.549			
食事会	0.917	0.322−2.612	0.871			
公民館活動	5.040	1.530−16.599	0.008	5.111	1.449−18.032	0.011
町内の集まりあり	0.632	0.169−2.355	0.494			
CEQ						
合計点高値群	9.880	2.900−33.657	<0.001	9.496	2.650−34.035	0.001
安心生活環境高値群	5.909	1.800−19.398	0.003	6.729	1.878−24.107	0.003
相互交流環境高値群	4.900	1.584−15.162	0.006	4.471	1.369−14.597	0.013
家族環境高値群	2.959	0.939−9.416	0.066			

なし，低値群を1とした

調整変数：年齢，性別

ことが生きがい意識を高めるために重要であると考えられる．

３．今後の課題

本研究の対象はADLが自立し，地域活動に参加している者であったため，地域活動に参加していない者の実態が不明である．そのため，参加していない者に対しても本研究と同様な調査を行い，実態を把握する必要がある．

本研究では，当初１自治体で目標サンプル数を

収集する計画であったが，対象者が集まらず，調査途中で調査地域を拡大した．石川県に居住する高齢者として研究参加者を募っていたため，参加者の居住する市町を特定することはできない．かつ，研究参加者は，1市1町に居住する高齢者に限定されたため，石川県全体とするには集団に偏りがある．石川県の高齢者のいきがいの実際を明らかにするためには，石川県の老年人口における各市町の割合に合わせた研究参加者を募り分析対象とすることが求められる．

結　語

本研究では，石川県内のA市・B町における高齢者の生きがい意識に関連する環境要因を検討した．その結果，石川県内のA市・B町に居住する高齢者の生きがい意識は，公民館活動，安心生活環境，相互交流環境と関連していることが示された．

高齢者が生きがいを持って健康に暮らし続けるためには，人とのつながりを持ち続けることができるような環境の整備が重要であることが示唆された．

利益相反自己申告

申告すべきものなし．

謝　辞

本研究に協力してくださったA市およびB町住民の皆様，A市およびB町の社会福祉協議会の職員の皆様，各地区公民館職員の皆様，老人福祉センターの職員の皆様，その他ご協力くださったすべての皆様に深くお礼申し上げます．本研究の一部は，第3回看護ケアサイエンス学術集会にて発表した．

文　献

1）厚生労働省：令和4年版　厚生労働白書第4章自立した生活の実現と暮らしの安心確保，第1節地域共生社会の実現の推進地1地域共生社会の実現について，https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/21/dl/2-04.pdf（accessed 2024/11/15）

2）野村千文：「高齢者の生きがい」の概念分析．日本看護科学会誌 25（3）：61-66，2005.

3）佐野裕和，籔脇健司，佐野伸之：地域在住要介護高齢者の役割遂行と環境要因が健康関連QOLに与える影響－身体機能の影響を含む包括的検討－．作業療法 39（1）：60-69，2020.

4）今井忠則，長田久雄，西村芳貢：生きがい意識尺度（Ikigai-9）の信頼性と妥当性の検討．日本公衆衛生誌 59（7）：433-439，2012.

5）石川県：いしかわ統計指標ランド 石川県の年齢推計人口～令和5年10月1日現在推計，https://toukei.pref.ishikawa.lg.jp/search/detail.asp?d_id=4827#download（accessed 2025/4/27）

6）杉田裕太，原毅，大沼剛ほか：訪問リハビリテーション利用者における地域差への　関連要因．日本老年医学会雑誌 59（1）：49-57，2022.

7）戸ケ里康則：サンプルサイズ緒論．順天堂大学医療看護学部医療看護研究 15（2）：1-8，2019.

8）吉田浩二，辻麻由美，松尾拓海ほか：地域交流サロンに参加する高齢者の生きがいに関する研究．保健学研究 34：21-29，2021.

9）Nakao Rieko, Nitta Akiko, Yumiba Megumi, etal：Factors related to ikigai among older residents, participating in hillside residential community-based activities in Nagasaki City, Japan, Journal of Rural Medicine 16（1）：42-46，2021.

10）Yabuwaki K, Yamada Y, Shigeta M: Reliability and validity of a Comprehensive Environmental Questionnaire for community-living elderly with healthcare needs. PSYCHOGERIATRICS 8：66-72，2008.

11）青木邦夫：在宅高齢者の性格特性，生きがい感関連要因及び生きがい感の関連性．山口県立大学学術情報 8：7-17，2015.

12）総務省：令和6年統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで－統計トピックス，

No.142，2024．https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics142.pdf（accessed 2024/11/15）
13）総務省統計局国勢調査 e-Start 政府統計の総合窓口：令和 2 年度国勢調査結果，男女別人口及び人口性比，2024．https://www.estat.go.jp/dbview?sid=0003410379（accessed 2024/11/15）
14）橋本和明，竹内武昭，今村英之ほか：都市部高齢者の中枢性感作に対する主観的 QOL および社会的孤立の影響．心身医 61（5）：451–459，2021.
15）三村泰広：高齢者の活動と居住環境－生きがい向上と医療サービス利用の適正化に向けて－，日本福祉のまちづくり学会福祉のまちづくり研究 23：1–13，2021.
16）長谷川明弘，藤原佳典，星旦二ほか：高齢者における「生きがい」の地域差－家族構成，身体状況ならびに生活機能との関連－，日本老年医学会雑誌 40（4）：390–396，2003.

Environmental Factors Related to Ikigai among Elderly individuals in the Community -Participants in Community Activities Residing in B Town, A City-

Haruna YOKAICHI, Yui KATO, Tomoko YAMAJI,
Haruna USHIMURA, Shihomi SAKURAI

1) Ishikawa Prefectural Nursing University

Abstract

Objectives: The purpose of this study was to identify environmental factors associated with ikigai among community-dwelling older adults.
Methods: A questionnaire survey was conducted among older adults aged ≥65 years residing in A City and B Town. The questionnaire collected data on demographic characteristics, living conditions, the Community Environment Questionnaire (CEQ), and the Ikigai-9 scale. Data were analyzed using the chi-square test, Fisher's exact test, and logistic regression.
Results: A total of 60 participants (effective response rate: 57.1%) responded to the survey. Ikigai was found to be significantly associated with participation in civic center activities, total CEQ scores, and the “Secure Environment” and “Interactive Environment” sub-scale.
Conclusion: The findings suggest that ikigai among older adults is closely associated with environmental factors, particularly social interactions within the community. To support a strong sense of ikigai, it is crucial to foster environments that promote continued social engagement and maintain meaningful interpersonal connections among older adults.

Keywords

older adults, ikigai, community environment, living conditions